

ヴォーリズの1930年代— 近江兄弟社への改称から

西 由香利

はじめに

本発表の内容は2020年3月に提出した修士論文『ウィリアム・メルル・ヴォーリズの価値観：自叙伝からみえるもの』の紹介から始めた。これはヴォーリズの1931年までの人生に焦点を当てたものである。一次資料としてヴォーリズの自叙伝である『失敗者の自叙伝』を選んだ。これは1951年から1957年までの間逐次刊行物に連載されていたものを召天後の1970年に出版されたものである。その修士論文の結論は「このようにヴォーリズの価値観はキリスト教に基づき利他的であり、「人」を想いやっている。それがヴォーリズ建築にも現れていることから、現在の保存運動や文化財登録につながっていると考える。」と導かれた。本発表には加えて、次の時代の1930年代、特に1934年2月2日にヴォーリズの伝道が「近江ミッション」から「近江兄弟社」へと改称されたことへの問題意識から背景をみることを目的とした。それは改称に関して前向きな発言が近江兄弟社内から発信されていることに違和感を持ったからである。以下、ヴォーリズの生涯を概観し、続けて、近江ミッションが改称されるまでとその前後を検証する。その手立てとしての一次資料は、近江兄弟社から発信されている『湖畔の声』とし、ここから検証する。

ウィリアム・メルル・ヴォーリズ／一柳米来留 (1880-1964／1941-1964)

1880(明治13)年10月28日カンザス州レヴンワースに誕生する。大自然とキリスト教信仰に育まれたアメリカでの生活であった。少年期・青年期は大自然の中、合理性と公正、異文化理解を身につける機会もあり、キリスト教倫理観の中で育まれた。建築家を目指していたヴォーリズはマサチューセッツ工科大学(MIT)に合格していたが、経済的な事情により地元のコロラド大学に入学し

た。そして、MITに編入することを前提にコロラド大学で学んでいた。しかし、1902年には学生伝道隊運動(SVM)の大会に参加する機会を得、そこで外国伝道への回心が起こった。それは、その中の講演で聴いた義和団事件に遭遇した婦人宣教師、テイラー夫人による体験であった。それは中国で起きた進出する欧米列強に対する民衆による反乱でキリスト教もターゲットにされたものであった。そこでヴォーリズはキリストに「お前は どうする」と問われた幻をみた。そして、伝道隊学生志願の決心カードに、「今まで宣教師の行ったことのない、今後も外国伝道団が手をつけそうもないような所へ行って、独立自給で神の国の細胞を作ってみたい」と書き添えている。この決断は当時のヴォーリズにとって建築家になることを諦めることを意味していた。

その後、YMCAを通して、1905年に滋賀県立商業学校に英語教師として来幡する。ここで課外活動としてのバイブルクラスを開く。これは前任者も行っていたものであった。そのバイブルクラスは吉田悦蔵、村田幸一郎らも参加した。しかし、2年後の1907にこれら伝道を理由に解職される。この間にバイブルクラスを発展させ、日本で初の中等教育機関におけるYMCA活動を始めている。解職され、経済的基盤を失ったものの、近江八幡に留まることを決心し、教え子たちと近江ミッションを結成し伝道に献身する。1919年には子爵の三女一柳満喜子と、自ら設計した明治学院のチャペルで挙式した。満喜子も加わり、近江ミッションの中で教育が満喜子により充実していった。満喜子はプリンマーでアリス・ベーコンに師事し、津田梅子とも親交があり、当時の最先端教育を実践した。

ヴォーリズは1941年に日本に帰化することを選択し、それ以降は日本人として一柳米来留の名で日米開戦後も日本で暮らした。終戦に際して、近衛文麿とマッカーサーとの折衝に尽力している。そして、1949年には国際基督教大学献学において、主任建築士に選ばれた。現在もキャンパス内にその作品が残されている。1957年にくも膜下出血で

倒れ、長期に亘って病床に着き、1964年に召天した。その葬儀は近江兄弟社と近江八幡市による合同でいとなまれた。

近江ミッション (1905・1911・1918-1934)

近江ミッションは①ヴォーリズが来幡した1905年とする考えもある。そして公的には二つの年、②近江基督教伝道団を結成した1911年とするものと、③事業展開ができるように近江基督教慈善教化財団を組織した1918年とするものである。

①は1905年にYMCAを通じて、滋賀県立商業学校教師として2月2日に来幡し、課外活動としてバイブルクラスを開き、共鳴者を増やしていったが、その伝道のため解職された。しかし、近江に留まることを決意し、受洗した吉田悦蔵と共に活動し、吉田はヴォーリズを支えた。1908年に京都YMCAに建築設計監督開業し、伝道への回心の際に諦めた建築に本格的に携わるようになった。1910年にヴォーリズ合名会社設立し、村田幸一郎が加わった。経済的基盤が整ったと共に②の1911年に宗教団体である近江基督教伝道団を結成した。その翌年にはキリスト教伝道、家庭雑誌『湖畔の声』が創刊された。③は宗教団体では事業展開が難しいことから1918年に近江基督教慈善教化財団設立した。そして同年に当時は偏見があった結核専門の近江療養院が開設した。1920年には近江セールズ株式会社が設立され、ハイド氏の好意からメンソレータムの販売が開始され経済的基盤が築かれた。そして、1934年に近江ミッションから近江兄弟社への改称が行われた。

1930年代はヴォーリズの活動が充実していた時期であった。それは現在も残されている建築にもみられる。ヴォーリズ建築のうち、学校建築として名建築とされる作品4件を下記の表に挙げる。2校は日本のキリスト教から始まる女性を対象と

する教育機関、1校は韓国のキリスト教から始まる女性を対象とする名門教育機関、最後の1校は公立の小学校である。

以下の表1にあるように、建築そのものだけでなく、保存に向けての経緯や教育に向けるヴォーリズの考えが感じられ、ヴォーリズ建築の学校建築の素晴らしさがわかる。また、このような作品を生み出した近江ミッションの1930年代は充実していた時期でもあった。しかし、1934年に突然近江ミッションから近江兄弟社へ改称が行われた。土肥(1980)はこの時代背景を次のように述べている。「1930年代から40年代前半は、大正デモクラシーという幾分自由で、ある程度の政治参加の可能な時期より、日中、太平洋戦争を迎えてきびしい統制と容赦のない動員の行われた時期までであり、文字通り激動の時代であった。」とあり、近江ミッションの最後が1934年2月1日であったのも、大正デモクラシーというヴォーリズの活動と親和性があった時期の終焉と重なるのであろう。続いて、この頃の『湖畔の声』に投稿された文章をみていく。

改称そのものがおこなわれた1934年2月をはさみ、1月号・2月号・3月号を表2に提示する。

改称一ヶ月前の1月号はヴォーリズによる「第一の故郷への旅」が寄稿されている。ヴォーリズのアメリカへの旅で日本を理解を得るのが第一の目的の旅であったとも読み取れる。それはアメリカの反日感情を前提としての行動が文中に確認できるからである。具体的には日本のアジア侵攻や日本からの移民に対して、アメリカ人に理解を得ようと発言していた。文中には前回の訪問(満州事変・上海事変の最中)より、アメリカ人の対日感情が良好との内容が述べられている。しかし、1933年に日本が国際連盟を脱退したその時代背景を考慮すると、この真偽はわからない。

表1

年	名称			所在地
1933	神戸女学院	キャンパス全体を最良の条件下でデザイン	重要文化財	兵庫県
1933	東洋英和女学院	1993年に解体され旧校舎から引き継がれたものや意匠が再現		東京都
1935	現・梨花女子大学	建物は現存し、最新の機能を持つペロー設計の建物と共存		ソウル
1937	現・豊郷小学校	建築費は一人の近江商人の寄付による	保存運動から現存	滋賀県

表2

号	タイトル
1934.1月号	V「第一の故郷への旅」
1934.2月号	Y「改名是非…近江兄弟社」、V「近江ミッションの最後」
1934.3月号	V「近江兄弟社の理想」・「鎖とケーブル」

Vはヴォーリズによる文章 Yは吉田による文章

そして、改称が行われた2月号である。ここでヴォーリズは、近江ミッションは死に、近江兄弟社は復活したと述べている。聖書の物語に譬えていると読み取れる。そして、その中身は変わらないとも述べている。復活した日は誕生日で、ヴォーリズの来幡と同じく2月2日であること、誕生日と名前は大切であることもヴォーリズにより、記されている。吉田も名前について考えを述べている。近江ミッションは本名でなく、近江兄弟社が本名であるとする改称に前向きなものである。そして、両者共、それをアメリカや外国のものでない団体であると強調している。

改称から一ヶ月後の3月号にはヴォーリズはタイトル通り近江兄弟社の理想が改称のその日に語られた。それが文字になり掲載されている。それまでのヴォーリズの回心からの歩みを再確認しているような同様の内容である。五理想として、①同心協力、②デモンストレーション、③信仰、④能率、⑤神の国の模範、が掲げられている。③の信仰と⑤の神の国の模範は回心の時に既にヴォーリズが掲げていたと考える。もう一方の「鎖とケーブル」は、外見は柔らかいが、実は強いケーブルが近江兄弟社の家族的な繋がりに求める姿であるとの内容である。

まとめ

本発表ではまず修士論文を元に、ヴォーリズの人生を概観し、その上で1930年代を1934年2月2日に行われた「近江兄弟社」への改称から検証した。1931年には十五年戦争期へと入り、改称前年の1933年には日本は国際連盟を脱退した。この時代背景から、ヴォーリズが1932年ごろと思われる先の渡米と今回のとを比較し対日感情が良好であったと1月号で述べている。その真偽はわからないが、疑わしい。2月号で改称を伝え、改称で本名を得たとの前向きな発言は「ミッション」の名が招くであろう危険からの回避であることは、二人共にアメリカや外国ではないと言及していることから推測できる。

「植村環と戦時下のキリスト教— 日本YWCA機関誌『女子青年界』を手がかりに」

服部 直美

日本で二人目の女性牧師、植村環については多

岐にわたる活動・業績にもかかわらず、柏木教会信徒による小評伝と、柏木教会信徒有志によって編纂された『植村環著作集』（全三巻）、説教集があるだけで、外在的視点から植村に焦点をあてた研究はおよそ見られない。だが、植村は「戦争協力」「キリスト教と天皇制」におけるキーパーソンだった。植村が毎号のように寄稿した日本YWCA機関誌『女子青年界』を手がかりに、植村と戦時下のキリスト教について考察していきたい。

植村は、1890年、牧師で神学者の植村正久と、その妻季野の三女として生誕した。1905年、富士見町教会にて父から受洗した。高校卒業後は、医師を目指してアメリカのウェルズリー大学に留学したが、途中で専攻を哲学に変えた。4年後に帰国してからは、津田英学塾などに勤務した。1917年、第一次世界大戦中であつたが、川戸洲三と結婚し、上大崎に住居を構えた。翌年、長女俊子が誕生、第一次世界大戦も終結した。1919年6月、夫洲三が死去したが、この時植村は妊娠中で、11月に長男晴彦が誕生した。12月、前年からアメリカに留学していた妹恵子の訃報がもたらされた。1923年、長男晴彦が病死した。植村は1924年12月に、現在柏木教会が建てられている地所に父母と共に転居したが、年が明けたばかりの1月8日、植村正久がこの世を去った。自分に向かう神の召命を悟った植村は、幼い我が子を母に任せて渡英することを決意した。エディンバラのエディンバラ大学神学部などで学んだ。帰国してからは東京女子大学などで教鞭をとる傍ら、自宅を開放して開拓伝道を始め、これが現在の柏木教会の元となる。

1931年、満州事変が起こり、日本は動乱期に入るが、柏木伝道教会では教会堂の建設式が行われ、伝道活動は滞ることがなかった。1934年4月、植村は日本基督教会東京中会において教師に任職され、正式に牧師となった。これは、前年12月に牧師按手を受けた高橋久野に続く、日本で二人目の女性牧師誕生であった。1938年、植村は日本YWCA（基督教女子青年会）会長、世界YWCA副会長に就任した。1939年、第二次世界大戦が勃発。時局が混迷するなか、「宗教団体法」の公布に基づく教会合同が行われ、日本基督教会が成立した。植村はその立役者の一人として婦人事業局長を務め、東奔西走した。

1945年3月、東京大空襲があり、5月に柏木教会の会堂および自宅も空襲で焼失した。8月に日

本はポツダム宣言受諾し、9月に第二次世界大戦は終結した。翌年5月、植村は戦後初の民間人として渡米し、約一年にわたり全米を巡回した。帰国すると、9月から宮中の呉竹寮にて三人の内親王への聖書講義を始めることとなった。1948年からは皇后への聖書講義が始まり、植村の三内親王・皇后への講義は1951年3月まで続けられた。1951年、サンフランシスコ条約が締結された。6月、柏木教会は日本基督教団を離脱して、この年5月に再発足した日本基督教会に加入した。1955年、世界平和アピール七人委員会が結成され、植村もその一人に名を連ねた。1973年、高齢のため牧師引退し、1982年死去したが、それまで原水爆実験禁止、核兵器拡大防止などに関連して、数多くのアピールに連署し、平和活動を推進した。

植村の思想的変遷をたどる資料としては、日本YWCAの機関誌『女子青年界』を中心に見ていく。ほぼ毎月植村自身が執筆しており、時局に対する考え方を読み取るのに有用だからだ。また、戦後に編纂された柏木教会信徒有志によって編纂された『植村環著作集』には所収されていない論稿が多数ある。

日本YWCAは女性キリスト者を組織し、「伝道」と「社会活動」を推進するため、1905年に設立された。その機関誌は創立の一年前より発行され、敗戦前後の1944年から1946年の間の廃刊を除き現在まで刊行されている。機関誌の名称は、『明治の女子』（1904年5月号～1912年7月号）、『女子青年界』（1912年9月号～1944年2月号）、『女性新聞』（1946年3月号～1950年12月号）、その後現在に至るまでは『YWCA』となっている。

『女子青年界』から見る植村の思想は、(1)日本YWCA会長就任から1939年まで、(2)1940年—変化の年、(3)1941年—「新秩序進展の年」、(4)1942年—「東亜解放の御命令を全能者より受けて」、(5)1943年—戦局の難しさを受けて、(6)1944年から終戦にかけて、と分けて、その時ごとの傾向を読み取っていくこととする。

(1)の時ににおいては、世界では第二次世界大戦勃発していたが、植村は父母の模範的クリスチャンとして姿などを綴っている。(2)の時期に入ると、「皇国に対する御奉公に過誤なからんことを期せねばならぬ」と述べるなど、植村の主張に変化がみられ始める。(3)ではその傾向がより鮮明になり、「ヒットラアヤムソリニも、ある目的を果たすための神の器である」と述べたり、大東亜帝国の建設が「神の御計画」であるという認識を

表したりしている。(4)の時期になると、「実に日本は東亜解放の御命令を全能者より受けて矛をとったと我らは信ずる。何故なら、東亜解放は歴史の必然であるし、歴史の必然は全能者の御導きのままに動いて来た」と述べる。また、巻頭説教で、ローマ帝国でキリスト教が国教となったことを例に挙げ、この戦争で日本が世界帝国となることをキリスト者が後押しすることで、神の「奇しき聖なる御処置」が成されると説く。

(5)の時期となると、前年までの強気な論調に陰りが見え始める。しかしそれは、植村に戦争に対する懐疑心が湧いたからというよりは、戦局が難しいことを報道等で知ってことだったろう。なぜなら、『女子青年界』には続けて、戦死者を「貴き犠牲」と捉え、「東亜解放は歴史の必然」「歴史の必然は全能者の御導き」と明言する寄稿をしているからだ。植村は、この「試練」「苦難」の時に「決意」を持って立ち向かうべきだと読者を鼓舞する。(6)の時期に入ると、植村は2月号の巻頭言で「我らは大日本国の民であるのだから（…）神よ憐れみ助けて、この大目的を達成せしめたまえかし」と述べているが、この号で『女子青年界』は終刊となった。物資も乏しくなっていたようで、1939年には30ほどだったページ数が、「終刊號」では表紙も含めて6ページしかない。

1945年8月14日、日本は連合国に無条件降伏を通告し、翌日天皇は国民に「終戦」の「詔書」をラジオで放送した。敗戦後すぐの8月28日に開かれた日本基督教団第十三回教団戦時報国会常務理事会では、各教会に発すべき令達を確定した。すなわち、われわれの誠が足らず、「報国ノ力」が乏しかったために、敗戦となったことを深く「反省懺悔」し、天皇の詔勅にあったように「皇国再建」に努めなければならないというものだ。12月に行われた戦後初の常議委員会で、戦争責任をどのように考えているのか問われた富田満統理は、「余ハ特に戦争責任者ナリトハ思ハズ」と答えた。富田は翌年の臨時総会で辞意を表明したが、その後も教団内の要職に就いていた。教団内では情勢の変化に応じた役職の交替はあっても、戦争責任にかかわる辞任や新任はなかった。のちに、日本基督教団は戦争責任を告白するようになるが、植村の柏木教会が日本基督教団を離脱する1951年6月までに、戦争責任を議論した形跡はみられない。植村の戦後は、戦時下のキリスト教会を総括することなく、当時喧伝されていた「新日本建設」のためにキリスト運動を起こそうという方針で再出

発したと考えられる。

植村の戦後の活動であるが、植村は戦後初めて渡米した民間人であった。それは北米長老教会婦人会の招聘を受けてのもので、米国訪問の途中で海を渡りジュネーブでの世界YWCA常任委員会の準備会にも出席している。欧米各地を訪問した約一年にわたる記録は、復活したYWCA機関誌『女性新聞』に「わが旅の記」として連載された。キリスト教団体の招聘を受けた訪問だったため、植村は各地で歓待され、講演を行い、礼拝で説教を担当することもあった。謝罪行脚とはほど遠いものだったが、YWCA 80周年記念誌『水を風を光を』には、「植村環、平和使節として渡米」という小見出しで、植村がフィリピンのイラノ(のちのフィリピンYWCA会長)の部屋を訪れて、日本人として「謝罪」したエピソードが紹介されている。この文章を読むと、確かに「謝罪」はしているものの、祈りをはさんで、キリスト教という「罪のゆるし」の話に変わっていることが分かる。ここでは、「日本の罪」が「人類の罪」に普遍化されてしまっていると、キリスト教史研究者の荒井英子は指摘する。荒井は、「戦争の加害者も被害者もひっくるめて無罰化し、戦争は悲惨なものだと捉え、平和を唱える動きがあった」とし、「罪の普遍化」と「無罰化」の二重構造で記憶の操作が行われていると主張する。

植村は、外国紙のインタビューで天皇はキリスト教と親和性が高いと述べるなど、戦後も保守路線を継続した。1962年の憲法調査会中央公聴会においても、「大戦の終局までの数十年間、天皇は実力者に利用される大層お気の毒な御身の上であったのです」という見解を示している。「大層お気の毒」な方なので、罰を受ける必要はないということだろう。植村は戦時下におけるキリスト教会の「戦争協力」のキーパーソンであったが、戦後そうした自らの言動に対し反省した形跡が見られない。また、『植村環著作集』には『女子青年界』に寄稿した国粹主義的な説教は所収されていない。

しかし、誰も戦争責任を負わず、そのまま平和路線にシフトしたことが、現代日本の問題へとつながっていないだろうか。もとより、傑出した牧師であり社会運動家である植村の業績を否定する考えはない。植村が行った活動を引き継ぎつつ、その一方で、残された課題を現代に生きる者たちが解いていくことが求められるのだろう。

無償・虚無・抽象——知性史の

中のささきふさ (1897-1949) —— (1)

早矢仕 理宇



マレーヴィチの作品
『シュプレマティズムのコンポジション (宇宙からのある神秘的な「波動」の感覚)』(1917)

「近代」における/からの問い

当時ロシア帝国領であったウクライナのキエフ近郊に生まれたカシミール・マレーヴィチは、『無対象の世界』(1927)で、「芸術は、創造するものでなく現実を模写する(複製する)もの」と思い込んでいる社会の見解を、「奇怪」だと指摘している。マレーヴィチは、「現実化」の活動の可能性に、生産的な(1)発明家の技術者、(2)創造的な芸術家と、現存するものに従属する(3)専門的な「描写家」を挙げる。彼らの活動において、(1)は「あたらしいものの創造」となり、(2)は「現にあるものの改造」(ともに進歩的)となる一方、(3)は「現にあるものの模造」(反動的)となる。ひとびとが(3)を好み、「芸術」だと認定するのは、つまり「規範」それ自体を真にうたがう力をあらかじめそがれているからではないか、と。

左様、世界の真実に「まるで関心のない」われわれは、知覚されるものの現象形態が変化することに興味をそそられ、視点の変化=幻影を安易に信じる。こうした状況で、たとえば国家権力が規範化を促すため、それが国民自身によるはたらきとみなされるような環境を強ければ、ひとびとの意識は改変され、あたらしい環境は「自然」なものとしていつしか固定されていく。

「現にあるものの模造」は、たとえダイナミックな様相を呈していても、究極において静的であり、あたらしいものの創造には、真の動態が招来されねばならない。その際には「構成」に留意することが肝要だ。なぜなら、構成こそはシステムの生成途上にあるがゆえ——。具象的な「対象」への「従属」という陥穽を避けるべく、無対象の世界を志向するマレーヴィチや他の芸術家たち

は、抽象表現に向かう。人間の生全般にかかわる「自律」が、真摯に希求された時代、芸術にとどまらず何かしらの創造をおこなうなら、無償の姿勢であらねばならないとは、覚醒した人間にとって自明の理だった。そして抽象志向は、不可視の領域に価値をみとめつつ、透徹した「視」を世界に巡らせる。

だが、戦争の世紀とも称される時代にあり、現前する可視的で具象的な対象に向かう人間の欲望や情念は、際限のない破壊にまで躊躇なく踏み出し、同じ種を殲滅させようと策略を張りめぐらす。そこに、底なしの虚無が生じる。だが、規範と安定ばかりを追い求めてきた人間が、果ての日、いかに現実の逆襲のごとき脅威と向き合えるのか？ 闇から目を逸らさず、なおも光を「見る」ためには、盲目的に可視の具象に向かう世俗の生活から、あえて逸脱を図らねばならない。

知的気圏

20世紀がまもなく明けようとする1897年、東京に生まれたささきふさは、1909年、次姉・大橋繁の養子となるため横浜に移住し、指路教会へ通うようになった。1921年に同教会初の長老となる繁は、すでに1906年、洗礼を受けており、1910年にはささき自身も受洗、1915年の御大典記念伝道の折には、養父・清蔵がそれに続いている。

日本近代に港都のプロテスタントとして、一度は共に信仰生活を送った3人は、しかし、のちに異なる途を歩む。長じてささきが、キリスト教会内のより革新的な自由思想に共振し、社会運動に身を投じていくのに対し、繁は、保守の立場で、変わらぬ信仰を生涯貫く。一方、弁護士として働いていた清蔵は、療養生活中の1926年に自死を遂げる。繁の信仰は、妹や夫を引き入れるほどつよいものでありながら、たとえ家族といえども、他の二人に同調はかなわなかった。

日本初の公園デザイナー長岡安平が、55歳のときに生まれた末子で、繁とは17歳の差があり、年長のきょうだいに囲まれ生育したささきは、幼時から己をextraのように感じていた、と回想する。幕末の混乱期、みずから自然に分け入り、師を頼らず独学で洋書をひも解いた長岡は、近代が明けた直後生じた需要に、創造的「知」を開花させる幸運を得た。

対照的に、養父となった大橋清蔵は、生真面目な性格で人望も厚かったようだが、ささきは最後までなじめないものを感じていたという。何より、「夫婦」と称される男女には「子」がなければな

らないという思い込みは、跡継ぎを必要とする「家」の思想へと容易につらなり、かかる規範を懐疑するささきが、養家に抵抗を感じたことは想像にかたくない。

きょうだいのうちで、明治的な価値観の立身出世を体現するごとく、帝大の法科卒業後、政治家となり、戦時には満州国國務院総務庁長を務め、戦後、公職を追放された長男の隆一郎は、ささきにとって遠い存在だった。しかし、職業柄、政治の現況やとりわけ戦争に関する情報は、常に彼からもたらされていたと想像される。1936年、2.26事件が起きたとき、ささきも雑誌にコメントを寄せているが、事件が進行する最中、保険会社の上層部にいる長姉の夫に、兜町方面からの情報を得ようとする自身の姿が描かれており、総じて政治経済の最先端を知れる位置にいたことがうかがえる。

一方、「最愛の小兄」と呼びかけられる次兄・義夫は、外語大の露語科卒で、ゴーリキーの『母』やアルツィバーシェフの『最後の一线』を翻訳した。さらに、果樹園芸界の革命児と称されたミチューリンの功績や、紆余曲折の末、モスクワの美術座で上演されることとなったチェーホフ『三人姉妹』の舞台裏、横浜の亡命貴族を訪問したときの逸話などについて書き残しており、当時、相当なロシア通であったと想像される。

また、双方の家が横浜市尾上町にあり、指路教会に通っていた関係で親しくなった岡田桑三は、ささきの人脈を通じ先鋭な芸術と社会主義思想に接近し、ドイツ留学で舞台美術を学び帰国後、映画俳優「山内光」としてデビューした。だが、演技よりは創作に関心があった彼は、日本プロレタリア同盟の創立に関わり、ハンドカメラで撮った山本宣治の告別式（右翼に暗殺された）のフィルムを携え、モスクワでエイゼンシュテインやブドフキンと交友を結ぶ。

青年・文学・キリスト教

日本近代に誕生した「青年」と「文学」は、その起源に、キリスト教との深い結びつきを有している。世紀の転換期に登場した「青年」は、当初、単に若い人間でなく、少数精鋭のエリート、それも前衛性の際立った男子を指した。20世紀初頭の青年は、真摯に生と対峙し、その潔癖もあいまって常に煩悶する存在で、中でも1903年、華嚴の滝に身を投げた一校生の藤村操は、青年存在の象徴としてひとびとの記憶にとどめ置かれることとなる。また、藤村の友人でキリスト教徒であった魚

住折蘆は、藤村の自死を揶揄——現場に遺された「巖頭の感」をパロディに——した牧師の海老名弾正と論戦を展開し、一校の校友誌に『自殺論』を発表した。

「青年」意識は、男子にとどまらず、女子にも同時代的に共有されたことが注視される。1905年発行のキリスト教系雑誌『明治の女子』には、「女子青年」の語が見え、そこでは青年的紐帯が謳われている。翌1906年には、岡山県山陽女学校の寄宿舎で、15歳の松岡千代が毒を仰ぐ事件が起こり、その死は全国的に報道された。松岡は、当時キリスト教会に通っており、遺書のことば「死は塵の世を通るべき、只一すじの道」からは、藤村同様の超俗志向が認められる。

また、日本における「文学」の創始には、先駆的「青年」が関わっており、それは佐幕派の子弟、中でもキリスト教に入信した者により担われたとの指摘がある。彼らは、新政府に登用された雄藩の出身者たちが、功利を重視したのに対し、パワーの競争に敗れながらも、理想主義的「精神革命」をおこなおうと試みたのだった。

1871年、キリスト教禁制の高札も撤去されない開港地の横浜で、宣教師や在留外国人による祈祷会が開かれ、J・H・バラの英学校在籍した日本人学生もそれに倣い、彼らの祈りは数十日にも及ぶ。そして1872年、近代日本における最初の教会「日本基督公会」が誕生。1880年には、小崎弘道らが‘Young Men’s Christian Association’を「基督教青年会」と訳し、会を発足させ、『六合雑誌』を創刊する。

近世の日本において「文学」とは、儒学にあきらかなごとく、究極「道」に関わるものであり、一方で、戯作と呼ばれる人情を描写した噺が、庶民を中心に人気を博していた。近代に入ってのちも、ふたつの系譜は「啓蒙思想」と「戯作文学」として、日本文学の基を成していく。ささきは、まさに前者の立場から、1918年（ロシア革命の翌年）書くことに就き、『女子青年界』、『六合雑誌』、『護教』、『婦人新報』（『貞操論』が懸賞で1等当選）等のキリスト教系雑誌に寄稿をおこなっていく。

物語を穿つ「視」

当初からささきには、職業作家になろうとする意志や、傑作をものしようという意識がなく、それでも求められれば柔軟に応じ、自在に書く力をそなえていたことが看取される。たとえば1935年の座談会で発された、最近「どうして書かないのか？」という質問に対する答え『なぜ書かないの』

は『なぜ書くの』と同様酷い問いだと思ひます。寡黙なせいもあるでせうが、割り込んで出て恥を残さずといった気がするのです」などからは、謙遜以上の含みが感じられる。

ささきが、「文学」の場において低評価を付され続けてきた背景には、「文学史」のドミナンス——日本近代に記述された——が存在する。当該の場で、「ささきふさ」は、日本近代文学の傍流・新興芸術派に属する群小作家とみなされている。その典型を示す菅野昭正の印象批評では、1930年に書かれた堀辰雄の『水族館』とささきの『ただ見る』が比較され、前者が、品格をそなえた「物語」を有し軽快な精神を表現している、とされるのに対して、後者は、浮薄な風俗の描写に終始しその軽躁さは現代小説のノリにも通じる、と断じられる。

だが、両作品で注視されるのは、その内部における語り手の「視」と構成だ。『水族館』では、時系列的にストーリーが展開されるが、作品世界は絵画のごとく枠に収まり、語り手のまなざしは物語の虚構を支配している。対照的に、『ただ見る』では、語り手の眼が、カメラアイのように動的で瞬時に移動する。また、主人公が、寝室でカメラ・オブスキュラ現象に興じるさまは、近世の観客 spectator でない近代の観察者 observer の「視」の所有をうかがわせる。

作品の外から構成を見れば、『水族館』は起承転結のあるまっつき「物語」だが、『ただ見る』は、短編であるにもかかわらず、「蛾」、「隅の少女」という二つの章から成っており、文と文の接続もなめらかなにされず、作品世界には、収斂より拡散の動きがうかがえる。菅野のような読みからは、拙い文章と映るのだろうが、むしろ推敲を経ない一筆書きめく勢いのある文章には、「物語」に抗し、それを穿とうとする意志が認められる。換言すれば、空間へのすどい目配りと「構成」への留意は、マレーヴィチの指摘する具象的な対象への従属を拒絶しているのである。

研究はいかにして可能か？

科学史と芸術史の交わる地点、中でも視覚のモダニティに関心を抱き、さまざまな資料にあたるうち、偶然ささきふさの存在を知った。『ただ見る』のタイトルに反応し、すぐさま作品を読み、反文学的創作の力量に圧倒されていた。

その後、ささきについて書かれた文章に目を通したが、作品に対しては低評価が付され、一対にされた私生活へは不躰な視線が浴びせられている

ことに、名状しがたい困惑をおぼえた。だが、その淵源には、近代由来の言説が存在し、戦前生まれの作家、評論家、研究者といった「日本文学」との関わりを生業としてきた者たち（主として男性）が、現代まで当該の言説を強固にしてきたことが確認されたのだった。そこにおいて、彼女の「知」は、周到に消し去られている。

遺憾ながら、かかる事態は、こと日本「文学」に限った問題ではない。具象的な事物を単にまとめたものが研究と称され、そのうちのある部分が権威化し、「歴史」として記述され、それに依拠した言説の再生産が続けられるうちは、反動の時間が続くだろう。パンデミック、東欧の戦争といった混沌のうちで、世界像の変更が求められている今日、研究に就くまえに、われわれの対峙せねばならない問題が存在する。同時に、そこには、未だ現前せぬ可能世界が潜んでいるに相違ない。

けれど音もなく流れるアンダー・カレントも時に何等かの形をとつて外面に表れんとする。

大橋房子『潜流』（1918）

会員著書紹介

続々と出版になった会員の著書

☆『日本におけるキリスト教保育思想の継承—立花富、南信子、女性宣教師の史料を巡って—』

熊田凡子著 教文館、2022年3月10日

熊田さんは、本書で次のように述べています。「昭和戦前から戦時下および戦後初期においてキリスト教保育に携わった日本人保育実践者たちが記録した一次史料の分析を基に、キリスト教保育の実態と教育実践を支える教育観や子ども観を明らかにし、保育実態史から見た日本におけるキリスト教保育思想の展開を通史的に実証した研究である」。

定価：8,000円＋税 著者割引 ￥7,040円

☆『タムソン書簡集』中島耕二編日本基督教団新栄教会タムソン書簡集編集委員会訳

教文館 2022年3月30日

タムソンは1863（文久3）年5月18日に来日、1915年10月29日召天、52年にわたって日本伝道に尽くしました。1873年9月20日日本基督東京公会（現在の新栄教会）を創立、日本プロテスタント黎明期に大きな貢献をした宣教師です。新たな宣教師の働きが明らかになる点でも貴重な書簡であ

ります。

定価：5,800円＋税 著者割引 ￥5,100円

☆『エステラ・フィンチ評伝—日本陸海軍人伝道に捧げた生涯—』

海野涼子著 芙蓉書房出版

キリスト教伝道のために単身来日、陸海軍の伝道の一生を捧げたフィンチの評伝です。フィンチは、1893（明治26）年24歳で来日、日本各地で伝道、29歳の時再来日。黒田惟信牧師（著者の祖父）と共に、「日本陸海軍人伝道義会」を横須賀に創立。海軍機関学校をはじめ陸海軍人が義会に来ました。40歳の時帰化、「星野光代」と名乗り、55歳で亡くなるまで伝道活動をしました。

定価：2640円（税込）著者割引2,200円

【※上記3冊の購入希望の方は岡部までお願いします。】

☆『横浜連合婦人会館史100年のバトンを受け取る』

公益財団法人横浜市男女協同参画推進協会、監修 江刺昭子 2022年3月30日

定価：2,200円（購入希望の方はフォーラム南太田に問い合せ、045-714-5911）大正初期から戦前にかけて女性が社会進出した時に婦人会館設立に奔走し、その活動を記録した手記が書籍化されました。それをまとめたのが、横プロの会員でもある江刺昭子氏でした。男女共同参画センター横浜南（フォーラム南太田）の前身が横浜連合婦人会館だったことはあまり知られていないと江刺氏はいう。婦人会館は、1927年関東大震災がいたころに建てられました。2022年4月8日朝日新聞神奈川版に写真入りで取り上げられました。

【編集後記】

会報71号をお届けします。コロナ禍にあって、私たちの研究会も大きな打撃を受けました。この間の研究会の足跡を簡単に触れると、2020年2月中島耕二氏による「横浜指路教会第二代仮牧師J・W・ノックス」の研究会後、コロナのため休会、同年10月再開することになり岡部一興が発表、11月は吉馴明子氏、12月は吉原重和氏の発表後また休会に入った。その後、2021年1月から9月まで休会。同年10月16日の例会から再開、10月、11月20日とズームで行ない、12月と今年の1月は、横浜指路教会で行ないました。2月、3月はズームで、4月からは対面とズームの両方で行なうことにしました。（岡部一興）